

— 資 料 —

## 地域住民と連携した授業の取り組み (第1報)

～栄養教育・指導論実習からみた効果～

本田 まり\* 西川 貴子\* 中野佐和子\* 才新 直子\*

A study of Class Collaborating with the Community :  
Effects on Student's through Nutrition Education and Practice Teaching

Mari HONDA Takako NISHIKAWA Sawako NAKANO Naoko SAISHIN

### 要 旨

学生にとって生きた実習となりモチベーションが高まるよう、食物栄養学科2年次の授業科目:「給食運営管理実習Ⅱ」と「栄養教育・指導論実習」が連携し、さらに地域住民と連携した授業を実践した。実践後の学生へのアンケート調査の結果から、栄養教育・指導論実習においては、地域住民を対象に、実際に栄養教育指導を行った学生の「自信」に対する効果や、実践はしなかったものの、他者による実際の栄養教育指導を見学した学生において「自分にもできそう」という自信が向上する可能性が示唆された。また、学生のチャレンジ精神を刺激し、「やる気」を引き出す可能性など、実践的な取り組みにある一定の効果があることがわかった。今後の実習での授業内容に生かすべき結果であると考えられる。

キーワード: 栄養教育指導論実習, 地域連携, 模擬授業, 自信, やる気

### 1. 緒言

神戸女子短期大学 食物栄養学科では「めざそう!食のプロフェッショナル」をスローガンに掲げ、時代が求める「食」のスペシャリストを養成するべく、栄養士免許を取得し、その資格を活かして社会に貢献できる人材育成に努めている。

本学科のカリキュラムは、主に栄養士資格に関する科目と、栄養士以外の資格に関する科目に大別され、前者の専門科目の一つに「給食運営管理実習Ⅰ,Ⅱ」と「栄養教育・指導論実習」がある。給食運営管理実習は、給食施設での給食管理として大量調理を学び、栄養士校外実習へ繋がる位置づけにある科目であり、特に2年次で開講している「給食運営管理実習Ⅱ」は栄養士校外実習直前に行く重要な実習である。また、同時期に開講している栄養教育・指導論実習では、人々への健康・栄養教育をいかにして行うかを実習にて学び、栄養士校外実習で栄養教育の一環として行われる給食対象者への指導(減塩教室や保育園児への食育など)や、ポス

---

\*神戸女子短期大学食物栄養学科

ター・リーフレット等の作成の意義、提供する食事そのものが人々への栄養教育指導の媒体となる給食との関係性等を学習している。両科目は平成25年度から、一部の内容で連携した取り組みを行っており、給食運営管理実習Ⅱでは、同時に栄養教育・指導論実習を行っているクラス分の給食を提供することで、より大量の調理の実践に近づけ、一方、栄養教育・指導論実習では、給食運営管理実習Ⅱの食育媒体として作成したポスターの評価や食事の試食評価を行い、次回の自己の実践に活かせるよう観察学習を行っている。さらに平成27年度から、両科目が学生にとってより生きた実習となり、モチベーションが高まるよう、地域住民と連携した取り組みを開始した。今回、その取り組みの授業評価として学生にアンケート調査を実施し、一定の効果がみられたので、第1報として栄養教育・指導論実習からみた効果について報告する。

## 2. 対象および方法

### 2.1 アンケート調査の対象

地域住民と連携した授業の取り組みを実践した対象は、食物栄養学科2年次生の各授業の受講者であり、「給食運営管理実習Ⅱ」はA、Bクラス（計59名）、「栄養教育・指導論実習」はC、Dクラス（計58名）において行った。取り組み実践後に各授業でアンケート調査を行い、本稿では「栄養教育・指導論実習」でアンケートの回答が得られたC、Dクラス（計54名）を検討の対象とした。

### 2.2 方法

地域住民と連携した授業の実施に当たり、安全面への対策（行事保険に加入）や住民への説明・同意等を経て、実施回数は2回とした。地域住民の参加者は、年齢上、高齢者と呼ばれる年代の方とし、1回当たりの参加人数は10名程度とした。1回目の参加者は9名、2回目は8名（2名欠席）で、年齢は70歳代後半から80歳代であった。

始めに栄養教育・指導論実習（Cクラス）で、高齢者への栄養教育を題材にした学生による栄養教育指導（プレゼンテーション）を行い、地域住民からの評価・コメントを頂いた。その後、給食運営管理実習Ⅱ（Aクラス）に移動・合流して皆で試食をし、栄養教育・指導論実習の学生（Cクラス）は再び実習に戻って評価反省会を行った。

以上の取り組みを、2回目は、栄養教育・指導論実習はDクラス、給食運営管理実習ⅡはBクラスと同様に行った。なお、栄養教育・指導論実習でのグループ学習は概ね7班編成であるが、地域住民への栄養教育指導を実際に行った班は、時間の都合上、Cクラスは7班中3班、Dクラスは7班中2班であり、これらはC・Dクラスの受講者58名中18名であった。残りの40名の各班による栄養教育指導はクラスメイトに対して行い、地域住民への栄養教育指導の際は、栄養教育を受ける立場としての聞き役であった。

これらの実践後に、給食運営管理実習ⅡはA、Bクラス、栄養教育・指導論実習はC、Dクラスの学生を対象に、授業内容と授業効果に関する無記名のアンケート調査を行った。栄養教育・指導論実習では54名の学生から回答が得られ、データの整理と検討を行った。

## 2.3 アンケート調査の内容

### 【栄養教育・指導論実習でのアンケート調査】

地域住民と連携した栄養教育・指導論実習を行うに当たっての学生の意識に関する事項（4項目）と、実践後の学生の意識に関する事項（4項目）について、アンケート調査を行った。回答方法は、例えば、「自信がない」「少しある」「自信がある」のように順序尺度となる3件法で回答する項目が中心であり、その他は複数から幾つかを選択回答する項目と自由記述項目であった。

（質問内容）

- ① 自分の興味・関心はどれくらいあったか
- ② 地域の方への栄養教育指導を自分の班が実践する自信はどれくらいあったか
- ③ 自分の班がやってみよう！という自分の「やる気」はどうだったか
- ④ ③の理由（複数選択回答）
- ⑤ 地域住民に栄養教育指導を実践した学生の自信の変化について
- ⑥ 地域住民への栄養教育指導を見学した学生の自信の変化について
- ⑦ 地域住民への栄養教育指導を見学した学生の今後のやる気について
- ⑧ 感想など（自由記述）

## 3. 結果と考察

地域住民と連携した授業の実践後に、「栄養教育・指導論実習」で行ったアンケート調査の結果を図1～3と表1に示した。

地域住民への栄養教育指導の実践について教員から話があった時、①自分の興味・関心はどれくらいあったか、②地域の方への栄養教育指導を自分の班が実践する自信はどれくらいあったか、③自分の班がやってみよう！という自分の「やる気」はどうだったか、について（図1）、興味・関心は「少しあり」が33名（61.1%）、「あり」が15名（27.8%）であった。他方、自分の班が実施する自信については「少しあり」が27名（50.0%）、「なし」が23名（42.6%）とほぼ2極化した。多少興味はあるが、自信がないという学生の存在も推察された。また、自分の

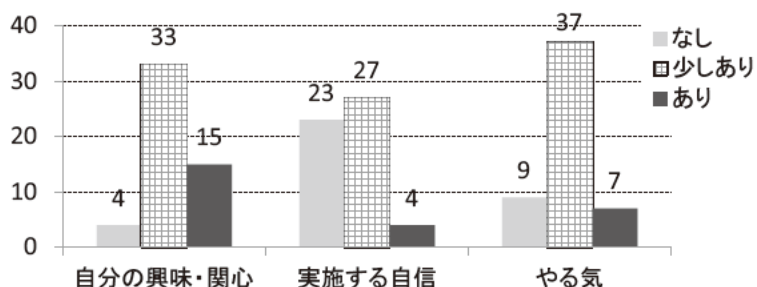


図1 栄養教育指導の実践に当たっての学生の意識（人）

\* n = 54名。無回答：興味・関心の項で2名，やる気の項で1名。

班がやろうとする「やる気」は、「少しあり」が37名（68.5%）と比較的多かった。自信の程度に違いはあるが、多少興味はある、やる気は少しある、という学生が多い可能性が考えられた。なお、やる気は「なし」も9名（16.7%）あり、モチベーションが上がっていない学生の存在と、それらを高める教育の必要性が示唆された。

前項の質問③自分の班がやってみよう！という自分の「やる気」はどうだったか、に対する回答の理由について、選択回答にて得られた結果をマイナス要因とプラス要因に分けて示した（表1）。マイナス要因として、「人前で話す自身がない」が54名中22名（40.7%）と最も多く、次いで「発表の準備を整える自信がない」が12名（22.2%）であった。プラス要因で多かったものは、「実践する方がやる気が出るから」が19名（35.2%）、「班員の協力体制が良好だから」が16名（29.6%）であり、「人前で話すことに（少し）自信がある」や「発表の準備を整える自信がある」は比較的少数であった。

「やる気」のプラス要因について検討すると、「実践する方がやる気が出る」のようなチャレンジ精神や、「班員の協力体制が良好」のような協力体制との関連性が示唆された。また、今回の地域住民への栄養教育指導（プレゼンテーション）に先行して、グループ演習1として第1回目の栄養教育指導をクラス内で実施したが、やる気のプラス要因として「グループ演習1でうまくいったから」が13名（24.0%）と成功体験が効果的であった例や、「グループ演習1でうまくいかなかったリベンジ」が6名（11.1%）と失敗体験を活かして向上しようとする例も一部でみられた。マイナス要因の「グループ演習1でうまくいかなかったから」の学生9名（16.7%）を、プラス要因へ転じることができるような教育支援も念頭におく必要があると思われる。

「やる気」のマイナス要因について検討するために、質問③の「やる気」との関連性をみると、やる気が「あり」と回答した7名は、1名がマイナス要因とプラス要因の両方から理由を選択しており、他の6名はプラス要因の理由を選択していた。一方、やる気が「なし」と回答した9名は、1名がプラス要因から複数選択していたが、8名はマイナス要因を選択していた。やる気が「あり」または「なし」と回答した学生の場合、概ね相応の理由があり、特にやる気「なし」では、「人前で話す自信がないから」が7名と多かったことがわかった。やる気が「少しあり」と回答した37名については、23名（62.2%）がマイナス要因とプラス要因の両方から理

表1 自分の班がやってみよう！の「やる気」に対する回答の理由（人）

マイナス要因		プラス要因	
人前で話す自身がないから	22	人前で話すことに（少し）自信があるから	5
発表の準備を整える自信がないから	12	発表の準備を整える自信があるから	5
班員と協力体制に問題があるから	2	班員の協力体制が良好だから	16
グループ演習1でうまくいかなかったから	9	グループ演習1でうまくいったから	13
面倒そうだから	2	グループ演習1でうまくいかなかったリベンジ	6
その他	0	実践する方がやる気が出るから	19

n = 54. 重複回答あり

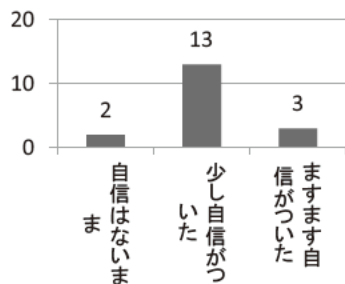


図2 栄養教育指導実践者の自信の変化(人)  
n = 18。無解答 3名。

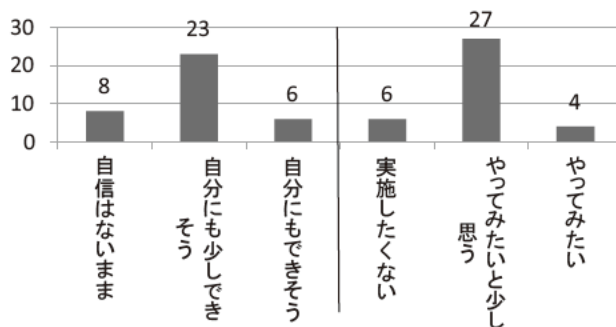


図3 栄養教育指導見学者の自信の変化とやる気の変化(人)  
n = 37。見学者は36名だが、栄養教育指導の実践者1名が重複回答。

由を選択し、5名がマイナス要因の理由、9名がプラス要因の理由を選択していた。マイナスの理由としては「人前で話す自信がないから」が14名と多く、次いで「発表の準備を整える自信がない」が8名であった。これらのことから、特に「人前で話す自信」について、授業でも考慮する必要があると思われる。

地域住民に栄養教育指導を実践した学生の自信の変化について(図2)、「少し自信がついた」が18名中13名(72.2%)、「ますます自信がついた」も3名(16.7%)みられ、実践を取り入れた授業は、学生の自信の向上を促す可能性が示唆された。地域住民への栄養教育指導を見学した学生の自信の変化については(図3)、「自分にも少しできそう」が37名中23名(62.2%)、「自分にもできそう」が6名(16.2%)であり、代理体験によって自信の向上がみられることが推察された。一方、「自信はないまま」が8名(21.6%)と、見学だけでは自信が向上しない学生も一定の割合でみられ、さらに実践的な授業を検討する必要性と、見学者であっても「自分にも少しできそう」と思えるような教育支援を改めて検討する必要があると思われる。栄養教育指導を見学した学生の今後の「やる気」については(図3)、「やってみたいと少し思う」が37名中27名(73.0%)、「やってみたい」が4名(10.8%)と前向きな回答が多く得られた。見学であっても、程度の差はあるもののやる気に対する効果の可能性が示唆された。

## 5. 結語

今回、学生にとって生きた実習となりモチベーションが高まるよう、食物栄養学科2年次の授業科目:「給食運営管理実習Ⅱ」と「栄養教育・指導論実習」が連携し、さらに地域住民と連携した授業を実践した。実践後の学生へのアンケート調査の結果から、栄養教育・指導論実習においては、地域住民を対象に、実際に栄養教育指導を行った学生の「自信」に対する効果や、実践はしなかったものの、他者による実際の栄養教育指導を見学した学生において「自分にもできそう」という自信が向上する可能性が示唆された。また、学生のチャレンジ精神を刺激し、「やる気」を引き出す可能性など、実践的な取り組みにある一定の効果があることがわかった。また、普段の授業では「やる気」を高めるために、成功体験や失敗体験を次に活かす

サポートが重要であり、人々への栄養教育指導の実践においては、人前で話す自信も重要であることがわかった。

今回の結果をこれからの実習の在り方に生かしながら、今後も地域の協力を得ながら検討を重ねていきたいと考える。